

農林業センサス 2020 発表

45歳以下の常雇者数が減少 次世代担い手対策が急務！

2020年度の農林業センサスを発表した。農林業センサスは5年に1度報告されており法人化や規模拡大の進展が強調報告されている。最新の2020年、令和2年2月1日現在の統計結果では農業経営体は107万6千経営体、林業経営体は3万4千経営体となり、前回報告時の2015年、平成27年時発表と比較して農業経営体は30万2千経営体、林業では5万3千経営体が減少している。因みに更に遡る10年前の2010年、平成22年時での農業経営体数は172万7千経営体、林業経営体においては140万経営体あったので10年前と比べると農業経営体は21.9%減となった。林業経営体には61.1%減と林業は急激な減少率となっている。速報値という形で当紙580号（2020年12月23日発行）でもお伝えしたが、農業経営体数のうち、個人および団体の経営体数の統計を見ると個人経営体数は令和2年度で103万7千経営体にて5年前の平成27年度と比較すると個人経営体数は134万経営体となっており22.6%減となっている。

一方、団体経営体数は令和2年度では3万8千経営体うち法人経営体数で3万1千経営体となっており平成27年度と比較すると団体3万7千経営体、法人2万7千経営体であったのでこの5年間で増加に転じている。また、経営耕地面積の集積割合の統計では農業経営体で経営面積が10ha以上の経営体は半数以上の55.3%を占めている。5年前に比べて7.7ポイントの上昇となっており面積の集約化が進行している結果だろう。ただし、この数値は北海道が入った数字となっているため、北海道と都府県を別に分けた経営体面積の推移を見ると、北海道は30.2ha、都府県は2.2haとなっていてどちらも経営面積は増加している（平成27年統計：北海道26.5ha、都府県1.8ha）ものの、都府県ではまだ2ha台にて大きな面積増とまでは言えない数値ではないだろうか。

また、発表された数値の中で気になった項目がある。それは、「常雇い」数の減少だ。その中で45歳以下の次の世代を担う年齢層に値する数値の減少が見逃げせない数値となっている。「常雇い」とは、1年のうち7か月上以上雇用されている方たちの事を指しており、平成27年時統計では9万3,380人いたのだが、令和2年度統計では6万7825人と27.4%減となっている。この減少数字は常雇いでの減少ではなく、常雇者が独立して農業経営者への数字に全て入れ替わっていただければ問題はないのだが、いったいどういう原因で減少してしまっているのか数字では読み取れず詳細が知りたいところだ。次世代の担い手である45歳以下の常雇者の減少のひとつの要因として農業従事者の平均年齢でも分かる通り、農業経営者がいよいよ高齢や健康上等の理由によるリタイアが一斉に動き出しているのではないかと危惧する。雇用主が現状の農業経営では儲からない事を理由に止む無く常雇者に経営委譲を断念し雇用主の世代で廃業を決断、常雇者も合わせて職を失うといったケースもあるのではないかと危惧する。最近、農業生産法人を経営する方々と直接情報交換をする機会を得ているのだが、経営者の悩みとしてなかなか右腕として期待して雇用するものの定着してくれない、とか従業員の声の声を聞くと仕事がキツイ割には給料が安いといった声を聞く場合もあり、経営者も従業員定着のためにあの手この手で働かせ方の見直しや福祉制度の充実を試みる等、苦心されている声が聞かれる。今回の統計結果では高齢層のリタイアだけでなく次世代を担う世代の就農者数も減少している事が判明した。現在、就農時50歳未満での新規就農を計画されている場合、新規就農者支援制度があるのだが、若手が農業に就き、定着してもらうためにはどうしたら良いのか、担い手対策はもはや待ったなしだ。

会社を引き継いで ～豊田肥料株式会社 代表取締役社長 豊田大介

2020年11月20日、私、豊田大介は、豊田富士雄より豊田肥料株式会社の経営のバトンを引き継ぎました。まずは、これまで豊田富士雄のもと豊田肥料株式会社に頂きました、皆様方のご厚情に深く感謝を申し上げますと共に、倍旧のお引き立て並びにご指導、ご鞭撻を賜ります様、心よりお願い申し上げます。

さて、私がバトンを引き継いでから、早半年が過ぎましたが、状況は大変厳しいと感じています。特に、未だ出口の見えない疫禍と、それに伴う社会生活の在り方の変動は、弊社実績にも大きな影響を与えています。率直な実感としてあるのが、「今までのテッパンが通用しない」ということです。弊社も間もなく創業160年を迎え、些少なりとも様々な経験を積んで参った肥料屋ですが、このような大変化の波にさらされたことは、そう多くはなかったのではないのでしょうか？本当にとんでもない時に引き継いでしまったと、身の引き締まる毎日であり、これまでの経営者の背中が日に日に遠く大きくなるのを感じる毎日です。しかし、引き継いだからには、泣き言ばかり言うてはいられません。変化の時代はチャンス時代、言い古された言葉ではありますが、この変化に対応し続けていけば、必ず次の道が拓けてくると、私は信じています。周囲を見れば、弊社も含め、仕入れ先様、小売店様、農家様、様々な現場で、世代交代が急激に進んでおり、世代交代が上手に進んでいる所に成長への大きなチャンスも集中してきているように感じています。農業に限らず、商売を取り巻く環境や活用される技術・ツールが目まぐるしく変化し、仕入れ先様・販売先様双方が様変わりする中、考え方や価値観も大きく変わってきています。私たちだけが取り残されるわけにはいかないのです。そんな不安と重圧と気概とが入り混じって迎えた社業引き継ぎの時、私が社員に向けて伝えた言葉を紹介して筆を収めます。伝えたかった考えは、先輩方から社業を引き継ぎ、今後も繋げ続けていくために、「変えてはいけないこと」と「変わらなければならないこと」です。「変えてはいけないこと」これは、創

業以来それぞれの時代で先輩方がお取引先様皆様と奮闘する中で積み上がってきた「弊社らしさ」で、激動の時代、私たちが社業を進める中で支えとなる礎にあたりと考えました。伝えた言葉は、我が社の在り方として「大切にする」「楽しいを生む」、業務に対する心構えとして「真面目に」「誠実に」「プロ意識を持って」です。「変わらなければならないこと」これは、今の時代を乗り切っていくために会社全体で共有したい方向性で、社業を進めていく推進力にあたりと考えました。伝えた言葉は、今年度のスローガンとして「情報技術を活用し変化を勝ち抜こう！」です。まだまだ経営者としても人間としても未熟で、先輩の皆様方の足元にも及びませんが、変化の時代の承継者として、商社の皆様、メーカーの皆様、全国で活躍される同じ肥料商の皆様、お客様、そして社員、全ての絆を大切に、力に変え、生産者の皆様の楽しい農業経営のため、全ての皆様と一丸になって勝ち抜いていく！強い想いで走っていきます。今後とも、暖かくも厳しいご指導とご鞭撻、ご支援、並びに一層のご厚誼を頂きます様、何卒よろしくお願い申し上げます。

末筆になりますが、貴重な紙面にこの様な機会を下さった、三菱商事アグリーサービス様とMACジャーナル編集部の方々に、深く感謝申し上げます。



豊田前社長(左)から豊田新社長(右)へバトンタッチ

豊田肥料株の会社紹介

創業は、幕末1863年(文久3年)の老舗肥料特約店。本社はクラウンメロンが特産の静岡県袋井市。

2020年11月(令和2年11月)豊田大介氏 代表取締役社長就任。グループ会社に豊田有機があり、オーダーメイドの肥料生産ができる。

ホームページ <https://toyodahiryo.jp/dkaisya/>

緊急事態宣言が延長になりました。何事も慣れてきた頃に油断が生まれます。Withコロナの生活も長くなってきましたが、今一度日々の生活の中から感染対策に気を引き締めたいですね。編集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL <http://www.mcagri.jp>